慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二つの商業史
Sub Title	Two types of commercial history
Author	服部, 謙太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.5 (1952. 5) ,p.353(57)- 356(60)
JaLC DOI	10.14991/001.19520501-0057
Abstract	
Notes	紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520501-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

競爭に優さる事は明らかである。（二三〇頁）此の事情は右圖の樣に供給曲線はその全生產額を通じて需要曲線の上方にあるが、限界供給曲線は或る範圍にわたつて需要曲線の下方に横たわる事があり、而も同圖RQPの面積がSRDの面積よりも大である樣な場合に限つて生じ得る。供給曲線の下降の傾斜の大きな事、及び需要曲線が供給曲線に並行的で之と接近している事が此の事情をもたらし易い。而も鐵道經營の場合には、その他の產業の場合よりも、之等の條件が成就する可能性が多い。此所に、鐵道運賃における、value of service、主義、すなわち第三度の差別獨占の優越が論ぜられる根據がある。（二三一——二三三頁）

然し鐵道の場合においてさえも、此の差別獨占の優越という事情が實際に存在する蓋然性は少いと思われる。（故に之を一般化して論ずる事は誤りである。）優越の事情が見られ勝ちなのは（その鐵道の發展途上において）近傍の富や人口の增加が此の事情をもたらす樣な一定段階に達し、而もそれ等が未だ單純競爭を可能とする程の發展段階には達していないという、（鐵道發展の）中間段階——それは比較的短期間のものと考えられるが——においてであるに過ぎない。（二三四頁）

此の最後の問題に關連して考慮すべき一事がある。一度、cost of service、主義採用の可能な段階に達した既設鐵道が、再び、value of service、主義を採る事を許されさえしたならば、

第二の路線、或いはその他の新設備を附加して社會の利益を增す事が出來るという場合にも、上述の所に似た論法で差別賃率制度の優越が認められるであろうか。その答は「然り」である。然し此の論斷を現實の場合に適用する事は難かしい。採用される差別賃率は、現實には新設諸設備のもたらす交通のみに適用されるのではなく、その全設備のもたらす交通に適用される事となるであろうし、一方右の論斷はそこまで擴張して適用する事を許されないのであるから。（二三四頁脚註）

Pigouは最後に地帶賃率制度に關する簡單な補章を附しているが、之は當面の問題からやや逸れるので此處には紹介を略する。

（一九五二—三—一一稿）

紹介

二つの商業史

服部謙太郎

一

商業史の研究は日本經濟史の各分野の中では比較的早く開拓の進んだ部門である。既に今日までに幾つかの概說書や數多の特殊研究も公にされている。それにも拘らず、最近の日本經濟史研究の重點は主として農業經營の類型・農民層の分化・農村構造の變化といつた問題の究明に置かれており、商業過程の分析はやや等閑に附されている傾向がある。その理由は何であろうか。それは從來の商業史が多かれ少かれ商業制度の歷史に過ぎず、今日の學史の段階に對應する新研究を生み出すためには、その方法自體に對する根本的な反省を必要とするという、いわゞ行き詰りの狀態にあるがためである。商業史はもとより商品流通過程の分析をその任務とする。然しその商品を生むものは農・工・漁・林・鑛等の諸產業であり、しかも商品は常に當該產業の生產形態によつて規制され性格づけられる以上、流通組織＝商業制度を生產形態から切り離して論ずるに止まつていた從來の商業史が、今日の歷史學の課題に答え得ないことは明白である。新しい商業史は流通過程の分析にのみ止まることなく、それを通じてその中に生產自體の發展を追及することを忘れてはならない。そして流通過程は要するに生產組織と社會機構との結節點をなすものであるから、生產の發展を追及するということは、社會機構の問題にまで立ち入ることなくしては不可能である。ここに當時の全社會機構との關連に於いて、直接的には生產關係との接觸に於いて、商業の果した歷史的役割を檢討するという商業史の新しい立場の根據がある。生產力の發展が如何にして古い社會組織を變革してゆくかということが現代の歷史學の中心的問題關心であるとすれば、その過程を具體的に知るための一つの鍵は流通過程分析＝商業史研究にあると言えよう。新たなる商業史の出現が待望される所以である。

二

豐田武氏の「增訂中世日本商業史の研究」は昭和十九年發行の舊著の增訂版であり、右の如き學界の要望に全面的に答えるものではないが、そのような方向への努力を舊著に比して一層歷然たらしめている點注目に價する。元來舊著は著者のその時までの研究論文を集大成し體系化したものであり、史料の博搜と老證の緻密と著眼の新しさとに於いて、日本商業史研究に一新紀元を劃したものとして夙に定評ある勞作であるが、然し今日の學史の段階から顧るとき、それは矢張り根本的には商業及び

商業制度を孤立して取り扱う舊商業史の系譜に屬するものであることを認めざるを得ない。しかるにこの增訂版にあつては、そのような舊商業史の枠を越えて、商業の發展を封建社會の全機構の中に於いて把えんとする著者の努力が明らかに觀取されるのである。その第一は、商業の發展を農村構造の變化即ち當時の鄕村制の成立との關連に於いて考えるという方向を明確にしている點である。このことは全體の編別構成が次の如く變化していることからも直ちに知られる。即ち舊著は「中世の產業界」「地方定期市場の發達」「都市商業の勃興」「近世商業への轉換」の四章から成り、「地方」と「都市」とが對置された形をとつているが、新著に於いてはこれが「商品流通の展開」「隔地取引の發達」「大名領國の形成と商品流通」「國內の統一と商業の發展」となつており、しかも舊著の第三章中の一節「定期市場網の確立」及び第三章中の一節「中世都市論」がいづれも新著第三章中に吸收されている點が注目される。鄕村制の成立を劃期とする生產力の昂揚こそが、商品流通の展開を促進し、それが隔地取引の發達を可能ならしめ、大名領國下に於いては地方定期市場の普及を背景として都市の成立が見られ、このような氣運の導くところが織豐政權による國內統一となり、商業圈は飛躍的に擴大するという著者の基本的見解がそこに端的に現わされているからである。次にその第二として商業發展の地域的差異が重視されている點を擧げることが出來る。

戰後に於ける地域別的研究の深化は、もはや從前の如く各地方の史料を任意に抽出してその時代の經濟發展の全般を推すことを不可能ならしめる段階に來ているが、著者はこの點について改訂を怠つていない。特に第一章第三節「庄園と市場」にその努力の跡が著しい。

總じて國內市場の成立過程を中心に据える新しい商業史の視角から本書を見直した場合、最も重要な意義を持つと考えられるのは、第一章第三節「庄園と市場」・第三章第一節「定期市場網の確立」・第四章第一節「商品流通の躍進」の三節であろう。この三節はその研究對象が適切である許りでなく、記述が最も動態的であり、吾々はこれを導きの糸として守護領國制→分國大名領制→織豐政權という社會構造の變化を地域別的に究明することが可能にされていると思うが、本書が中村吉治氏の「近世初期農政史研究」と竝んで、この時代の研究書として古典的地位を認められる所以は實にここにあると云わねばならない。

三

豐田氏の近著が新しい商業史への意圖を包藏し乍らも舊著の部分的增訂に止まつたためその趣旨が徹底し得なかつたのに對して、同じく舊著の增訂版ではあるが古島敏雄氏の近著「江戶時代の商品流通と交通」は、徹底的に新しい視角からする交通史＝商業史として特筆される。本書はその副題「中馬の研究」からも知られる如く、昭和十九年出版の舊著「信州中馬の研究」の大部分を母體として、それに全體の約三分の一に當る部分の新研究を附加したものであるが、交通史を商品輸送史として把えんとする著者の立場から、同時にそれは商業史でもあるのである。本書の全編を通じて著者の主張し提唱する新しい商業史＝交通史の方法は、第一章第二節第一項「流通過程分析の與えるもの」に示されており、要約すれば次の如くである。從來の商業史は流通商品の量、その量を生產する地域の廣さ等の量的限定を缺如している。この量的限定を嚴密に行うことによつて、流通過程分析の中から二つの面を學ぶことが出來る。第一に商品流通の量はその取引形態と共に商品生產の性格を示す一面を持つ。大量の商品は生產規模の大を示し或いは又一地方への生產の集中という事實をも敎える。このことから吾々は流通過程を通じて生產自體の發展段階を知ることが出來る。第二に大量の商品は最も多く直接生產者に封建體制の壓迫を意識させる媒介物をなす。というのは舊特權的流通組織が必ずそれをチェックせずにはおかないからである。隨つて吾々は商品流通過程の分析からその背後にある直接生產者層の新しい力及びその古い支配體制に對する反抗度を測定することが可能である。かくして從來の商業史・交通史は制度的な面から量的な面へとその視點を移動する必要があると。

以上の如き新しい商業史・交通史の方法の下に、第一章第二節以下では江戶時代商業・交通の基本的性格の探究に入り、貢租及び領主的商品の調達・輸送を掌る特權的商業・運輸と、これに對して直接生產者竝びにそれと結合した商人の手による商品の取引及び輸送の需要の發生・增大を明らかにし、この兩者の衝突の中に新興勢力の意欲が最も明らかに提示される點を、大阪商業の發展過程と信州中馬の例で追及する。第二章はこの第一の例の詳說で大阪及びその周邊に於ける商品生產の展開と、それに關連して新しい商品流通を擔當とする新興の運輸機關が、如何に舊來の特權的機關に抑壓せられたかを見んとする。第三章以下は第二の例として信州に於ける農業の商品生產の發達と、それを媒介する新興商人の利益と結びついた中馬業が、領主權の庇護の下にこれを壓服しようとする宿場側の努力にも拘らず發達してゆく過程を明らかにしている。

四

右のうちここで問題となるのは新たに書き卸された第二章「大阪における各種運輸機關の發展と相互間の紛爭」とりわけその第一節「大阪における商業の發展とその特質」であろう。「商業史に關するわれわれの持つ最高の遺產」たる「大阪市史」に主として依據するこの節の分析は、明治維新史における畿內の役割を檢討することによつて、明治維新それ自體の評價を志すとき、より遠大な構想の下になされているが、始めに述べた

著者の商業史についての見解を最もよく具現したものとして注目すべきである。著者は先ず大阪商業が江戸に安價大量の商品を積送るという幕府の方針下に江戸物價との關連において特殊の商業形態を示す點を指摘した後、正德四年（一七一四年）の大阪出入荷商品及び享保九年乃至十五年（一七二四―三〇年）の江戸送商品に關する史料から燈油原料と絹製品が出荷物の首位を占めることを明らかにし、この二つの商品に關してその生産地との關連に於いて大阪商業の特殊形態を探る。第一の油（菜種油・綿實油）の場合は初期には大阪の油稼仲間に特權を與え地方の油稼を抑制することを以て幕府の方針としていたが、天保年間の油方取締の改革以降價格を低下せしめる目的から地方搾油業者の活躍を認める方向へ進んだ。これに對して第二の絹製品の場合には、村方の原料生産者と新興商人が舊來の特權的株仲間と强く抗爭するが、その結果は特權商業が變容して在郷商人を古い封建的統制の枠内に吸收することによつて、新しい芽は抑制されてしまうというのである。大阪周邊農村の分析は最近頓に活潑化し、既に平野郷における綿作や、綿作地たる菱屋新田に關する研究などが發表され、古島氏自身も布施市周邊の分析を豫定していると記しているが、右の結論はこのような農村構造の面からの諸研究とどのように關連してくるか、興味ある問題である。兎も角もこのような大阪周邊の商品生産の發展が新興運輸機關を發生せしめ、これが舊來の特權的運輸機關と抗爭するところに交通史の問題が生ずるのであつて、第三節以下はこのような例として上荷船・茶船と劍先船及び陸上でのべか車・馬借の對立、更に菱垣廻船と樽廻船の角逐が取上げられている。交通史は商品輸送史でありその意味では商業史でもあるという著者の意圖がここに貫徹されているのである。

論文紹介

トマス・J・ワーテンベイカー
「中西部の型成」
（Wertenbaker, Thomas J., "The Molding of the Middle West" American Historical Review, Vol. LIII, No. 2, January, 1948. PP. 223-234.）

中西部の一婦人が「東部からは嘗て何も良いものは出來なかつた」と言つた時、彼女は西部の創造に對して有した東部の影響を輕視する多くの歴史家・著者を代辯した。併しアパラチア山脈以西の文明の發展は、その源である大西洋岸の文明を創出した力を研究する事によつて洞察出來よう。その力には、繼承物・地方的條件・ヨーロッパとの絶えざる交渉・坩堝（メルティング・ポット）の四つがあつた。

初期の我が文明の隅の首石はヨーロッパ人――英・蘭・アルスター蘇蘭・獨・佛・ウォルーン（ベルギー南東）・フランドル・芬蘭人――の移住によりすえられ、ジェイムスタウン、ニュー・ネザランド、プリマス、メリランド、サウス・カロライナ、フィラデルフィア等を據點として發展した。其は言語・宗教・傳統・慣習・政治・農法・建築樣式・手藝等の繼承物である丈でなく、地方的條件――土壤・氣候・地勢等――の産物であり、各植民地は相互に又英國とも異る文明を有した。そして植民者はこの坩堝で異質な文明と接觸し鬪爭しつゝ融合して行つた。他方ヨーロッパ就中英國との絶えざる交渉により多方面に亙つて英國風の影響を受けた。

この東部文明の定礎と發展は西部の其の型となつた。東部の西部に對する役割は、ヨーロッパの東部に對する其である。西部の文明は東部の其と異つてゐるが、ニュー・イングランド、ヴァジニア其他の諸州を知らずしては理解出來ない。東部文明の西部への移植は最も無視されて來た問題である。ヴァジニア、メリランドから移住者はオハイオ、インディアナ、イリノイ、ケンタッキー、ミズーリへ宗教・奴隷制度・建築法・慣習等を携へて、又アラバマ、ミシシピ、アーカンソ、テクサスへ移住し、又ニュー・イングランドからは、痩せた土地から生活資料を獲るに疲れた農民、出港停止令・一八一二年の戰爭・一八一六年の關稅により失職した水夫、政治的自由の制限を憤る貧民及び國教反對者が主として「北西部」に新しいニュー・イングランドを建設した。職業を求める貧者・巷を彷徨する職人は豐かな土地を見出し、ハドソン河以東の文明を移植し、ニュー・イングランド型都市を形を變へて到る所に建設する。教會・學校・裁判所は皆東部の影響下にあつた。他の諸州についても事情は同じであつた。移民の中には貧しい職人・農民以外に、富裕なイランター・土地投機業者・商人が混つてゐた。彼等は西部を幾分保守的にし、出來る限り東部の貴族政治を再現せんとした。

にも拘らずアルゲニ山脈の頂に立つた東部人は、彼の眼前にくりひろげられた大溪谷を眺めた時、如何に西部が東部と異つた社會であるかに一驚した。西部は凡ゆる人を徐々に西部化した。F・J・ターナーは西部文明の型成に於ける邊境の意義を强調し過ぎた。アメリカ民主主義の源は邊境ではなく、ウェストミンスター・ホールであり、其が植民地に移植され、一世紀半に亙つて植民地議會と知事との間の政治的鬪爭によつて强められ、更に其を最も價値ある繼承物と看做す人々によつて西部に持込まれたのである。併し西部の天地は凡ゆる意味で東部とは異つてゐた。西部の型成に與つて力あつたのは、繼承物や地方的條件以上に坩堝の力であつた。こゝで各移住者は夫々の過去を擔ひつゝ競爭し融合して行つた。奴隷制度・宗教・農法・禁慾的生活態度等を繞つて南部人とニュー・イングランド人は著しい對照を爲しつゝも、その中からやがて西部人が出現して